

報道関係者 各位

専修大学文学部教授 加藤 有希子著
ニューエイジ、スピリチュアル、自己啓発とは何か？
『カラーセラピーと高度消費社会の信仰』増補新版として発刊

専修大学(所在地:東京都千代田区、学長:馬場 杉夫)文学部教授 加藤 有希子は、この度『カラーセラピーと高度消費社会の信仰』(水声社)を 2026 年 4 月に増補新版として発刊いたしました。

現代社会では、宗教や科学といった従来の価値体系が相対化されるなかで、カラーセラピーをはじめとするニューエイジやスピリチュアル、自己啓発といった実践が広がりを見せています。

本書は、これらの現象を単なる流行や娯楽としてではなく、「高度消費社会における新しい信仰のかたち」として捉え、その構造と背景を学術的に読み解く一冊です。

著者は、カラーセラピーの実践への参与観察を含むフィールドワークを通じて、人々が「自分らしさ」や癒しを求める過程に潜む社会的メカニズムを明らかにするとともに、消費と信仰が結びつく現代の特徴を浮き彫りにします。

宗教に代わる意味の拠り所が模索される時代において、私たちは何を信じ、どのように自己を形成しているのか。本書は、現代人の価値観や行動を貫く深層を問い直し、〈信じること〉のあり方を再考する視座を提示します。

■書籍概要

書籍名：カラーセラピーと高度消費社会の信仰

著 者：加藤 有希子(専修大学文学部教授)

出版社：水声社

判 型：四六判/約 222 ページ

定 価：2,500 円(+税) 発売日：2026 年 4 月 20 日

■目次

プロローグ 鳥居の前で立ち止まる ― 二〇一五年から二〇二六年へ

第1章 キッチュの逆襲 ― 2020 年代の信仰と消費

第2章 現代のカラーセラピー ― オーラソーマという「キッチュ」

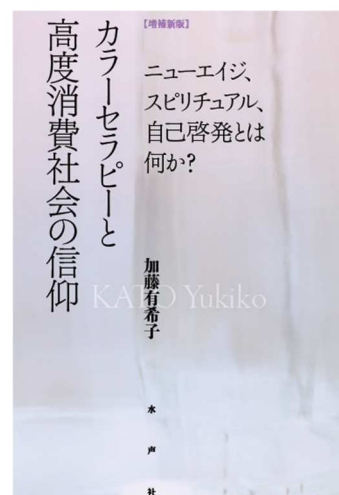
第3章 消費されるシンクロシティ ― 日常の中の小さな狂気

第4章 神なき時代の処方箋 ― ナラティブのおそろべき力

第5章 積極思考(ポジティブ・シンキング)の功罪

補遺章 チャクラとオーラの種明かし ― 確信犯 C・W・リードビーター

エピローグ 次の十年のために ― ふたたび二〇二六年から



<加藤 有希子 専修大学文学部教授 略歴>

1976 年、神奈川県横浜市生まれ。1999 年早稲田大学第一文学部卒業。慶應義塾大学大学院文学研究科修了後、デューク大学にて博士号(Ph.D.)取得。埼玉大学人文社会研究科教授を経て 2026 年 4 月より専修大学文学部教授。主な著書に『点描の美術史―印象派から現代アートまで』(水声社―2024 年)、小説では『オーバーラップ―飛行あるいは夢見ること』(水声社―2023 年)、『漆黒・桎梏』(水声社―2024 年)ほか多数。

[専攻]: 美学、芸術論、色彩論

<著者からのコメント>

本書は、美術史家である私が「専門外」とも言えるスピリチュアルをテーマに取り組んだ一冊です。刊行当時は賛否を呼びましたが、絶版後に SNS などを通じて再評価され、このたび復刊となりました。私自身、世界の意味やつながりを直感するような経験から本書を書きました。一方で、今日ではスピリチュアルは政治や経済の中枢にも浸透し、その光と影を見極めることがますます重要になっています。本書が、その問題を考える一助となれば幸いです。